

児童書・ライトノベル・文芸書の特徴 －形式と語彙の分析による比較－

橋口 亜美

児童書・ライトノベル・文芸書は、10代後半から20代を対象としたYA文学の発達や娯楽性の強い中間小説の広まりにより、対象となる読者層や娯楽色の強さからこれらを区別することが難しく、定義も曖昧になっている。しかしながら、これらの形式的な違いやテキストの内容的な違いを計量的に分析した研究は非常に少ない。本研究の目的は、最近10年間に発表された日本の主な児童書・ライトノベル・文芸書の違いを形式と語彙に着目して分析し比較することで、それぞれの特徴を解明することである。

研究方法は、児童書・ライトノベル・文芸書における代表的な文学賞を受賞した作品を対象とした形式分析と語彙分析である。形式分析に関しては、本自体のサイズ、1ページ当たりの文字数、総ページ数、ふりがなの有無、挿絵の有無について、目視で確認し分析を行った。語彙分析に関しては、本文のみをテキストデータ化し、手作業で成形した後に日本語の形態素解析エンジンである MeCab を用いて行った。分析項目は、テキストデータの総量、品詞ごとの割合、語彙の出現回数、語彙の感情分析、語彙の表現・表記の違いである。

分析の結果、児童書は1ページ当たりの文字数と総ページ数が少なく、ふりがなが多く用いられ、挿絵は周囲の状況も含めたイラストが多いことが形式の特徴として明らかになった。また、テキストデータの総量や形態素の種類数が少なく、漢字使用率とその難易度が低いことが語彙の特徴としてみられた。ライトノベルは、本のサイズが文庫本サイズで統一されていること、登場人物を主とした挿絵が多く用いられていることが形式の特徴として推察できる。また、テキスト量は児童書と文芸書の間程度であり、最も出現頻度が高い語の占める割合が低いこと、人物の容姿や性格を表す語が多く登場することが語彙の特徴として表れた。文芸書は、1ページ当たりの文字数と総ページ数が多いこと、ふりがなが少ないこと、挿絵が用いられていないことが形式の特徴としてみられた。一方で、語彙的にはテキストの総量と形態素の種類数が多いこと、漢字が多用され、語彙自体の難易度も高い傾向にあることが分かった。分析項目である品詞ごとの割合と語彙の感情極性については、児童書・ライトノベル・文芸書間で大きな違いは見られなかった。

これらの結果から、児童書は、著者や編集者の意図に基づいて、児童を読者対象とした難易度の低い図書として位置づけられている。ライトノベルは児童書よりは難易度は高く、文芸書よりは手軽に読めるような両者の橋渡しの役割が意図されていると推察できる。そして文芸書は、著者・編集側からの読者への意図や配慮は特にはみられず、テキスト自体の美学的な価値や作品の完成度への純粋な追求が強く表れているといえる。

(指導教員 小泉 公乃)